

都 医 ニュースNEWS

Vol.704

発行所 ■公益社団法人 東京都医師会 〒101-8328 千代田区神田駿河台2-5 TEL.03-3294-8821(代) 定価 ■1部 77円

令和6年度 関東甲信越医師会連合会 医師会共同利用施設分科会	01
底流 ほか	02
東京都医師会 定例記者会見 ほか	03
ふれあいポスト	04
感染症豆知識 ほか	05
地区医師会長からの一言	06



荒川区 汐入公園

令和6年度

関東甲信越医師会連合会医師会共同利用施設分科会



松崎茨城県医師会長による挨拶の様子

「これからの医師会共同利用施設」
～2040年を見据えた医療と介護の在り方～
をテーマにシンポジウム

令和6年8月31日（土）、令和6年度関東甲信越医師会連合会医師会共同利用施設分科会が茨城県医師会の当番で水戸市内のホテルにて開催された。

当日は、迷走し全国に大きな被害をもたらした台風10号が関東地方に接近しており、開催そのものが危ぶまれる状況であったが、幸い大きな天候の乱れもなく無事に開催された。

全体協議会に先立ち、13時より代表者会議が行われ、前年度の山梨県分科会の決算報告、医師会立病院・医師会共同利用施設は医師会活動の根幹でありスピリットである」と述べた。

次に、来賓として日本医師会の松本吉郎会長ならびに茨城県保健医療部の丸山慧部長（茨城県知事代理）より祝辞があった。松本会長は「医師会共同利用施設は医師会活動の原点であり、時代にマッチした在り方を提案すべきである」と述べ、また日本医師会が取り組むべき

喫緊の課題についても言及した。

代表者会議の報告に続いて、「これからの医師会共同利用施設～2040年を見据えた医療と介護の在り方～」をテーマにシンポジウムが行われた。まず4人の演者より、茨城県の医療・介護の現状、医師会病院・訪問看護ステーション・看護師等養成所など医師会共同利用施設の運営状況について発表された。

①「茨城県内共同利用施設10年の動向、現状、課題」茨城県医師会 齋藤洋子理事

②「きぬ医師会病院の取り組み」きぬ医師会病院 対馬健祐院長

③「取手北相馬保健医療センター医師会病院の取り組み」取手北相馬保健医療センター 医師会病院 鈴木武樹樹院長

④「水戸市医師会訪問看護ステーションみとの取り組み」水戸市医師会 細田弥太郎会長

続いて総合討論が行われ、茨城県も他の地域と同様に人口減少、医師・看護師の人材不足が問題となっていること、豪雨等の災害による医師会病院の運営への影響、医師会共同利用施設としての地域包括ケアシステムの取り組みなどについての討論が行われた。その中で、茨城県南部は首都圏と直結しているため、

地域の医療人材が流出するという、大都市近郊県ならではの問題も指摘された。

シンポジウムの最後に、日本医師会の黒瀬巖常任理事より総括がなされ、「医師会共同利用施設の運営に厳しい現状があるものの、2040年問題の課題解決のためにも、医師会共同利用施設の利用・使命を踏まえ、活躍できるよう盛り上げていきたい」と述べた。

特別講演は、慶應義塾大学法学部の片山杜秀教授による「尊皇攘夷：水戸学の四百年」であった。「水戸黄門」でお馴染みの徳川光圀公が、実は諸国漫遊はしていなかった、という衝撃的事実に始まり、助さん・格さんにはそれぞれ佐々宗淳・安積寛というモデルがいて、大日本史の資料収集・編纂に携わっていた等、参加者を引きつけた。そして水戸藩の置かれた状況、徳川光圀が大日本史の編纂を始めた理由、更に水戸学の成立から尊王攘夷に至る経緯など大変興味のある内容であったが、残念ながら冒頭の部分だけで講演時間が終わってしまった。機会があったら、ぜひ続きを聞いてみたい講演であった。

最後に次年度当番の神奈川県医師会の菊岡正和会長より挨拶があり、茨城県医師会の大場正二副会長の閉会の辞で分科会を終了した。

分科会終了後には懇親会が開催され、茨城県の地酒を楽しみつつ、他県の担当理事らとも交流ができ、大変有意義な会であった。

底流

首都大規模災害時に医療を
提供したいと考える医師会員へ

東京都の「災害時医療救護活動ガイドライン」が令和6年3月に改定された。この災害時医療提供体制の羅針盤をしっかりと了解することの意味は大きい。

おそろく多くの会員にはなじみの薄いガイドラインであるが、首都直下型地震に見舞われた場合、地区医師会あるいは会員個人がどのような位置で行動するべきかを読み取ることができる。特に地区医師会が市区町村・保健所などと共に医療救護活動拠点や緊急医療救護所を差配することになるため、ガイドラインに精通した対応が求められるだろう。

このガイドラインは東日本大震災の検証を踏まえ平成28年2月に策定され、その後熊本地震の教訓を込めて平成30年に第2版、そして今回新興感染症の経験を踏まえ第3版が発行された。新版では、東京DMATの支援活動、ライン（水、燃料）要請の流れやドクターヘリによる搬送などが改定された。

大規模災害の被災地は、さまざまな形で医療支援を受ける。東京都医師会が最大の医療支援チームを擁し、これまで多くの「支援」の経験を積んできた。一方、首都災害では被災地として経験未熟な「受援」にまわることになる。災害医療には多くの職種・団体、行政・民間・自衛隊等のさまざまな立場、遠方のチームなど、把握できないほどのプレイヤーが参入する。先の令和6年能登半島地震では被災側受援態勢への大きな負担を、東京都医師会が最大の医療支援チームを擁し、これまで多くの「支援」の経験を積んできた。一方、首都災害では被災地として経験未熟な「受援」にまわることになる。

荷が課題となった。医療・保健・福祉の提供を調整する対策本部では情報量や活動の拡大でロジスティクス業務が著しく増大し、対策拠点における統括業務が膨大となり、しかも長期化して押し掛かった。石川県の人口は111万人（震災時）で世田谷区の92万人と近似する規模だ。単純比較だが、より広域の首都直下型地震となると事前の周到な準備なくしては、混乱と疲労と消耗だけが待っていると云えてしまう。

そんな災害医療の現場を支える「受援」地区医師会の役割は大きい。各医師会長や担当理事は医療救護活動拠点での毎朝夕の連絡協議会等で受援側の代表となる。市区町村災害医療コーディネーターを中心にローテーションを組める。小平祐造

東京都 災害時医療救護活動ガイドライン (第3版)

- 業について、令和6年度の地区医師会別実施状況についてご報告した。
- （8）令和6年度在宅難病患者訪問診療事業地区別実施状況（第1四半期）について
- 第1四半期4月から6月の実施状況についてご報告した。
- ◎地区医師会からの報告
- （1）中央ブロック
- （2）城東ブロック
- ①葛飾区医師会附属看護専門学校における看護師コースと准看護師コースの両学生募集ポスターについて
- （葛飾区医師会）
- ②HPVワクチンキャッチアップ接種について
- （江戸川区医師会）
- （3）城西ブロック
- ①海外医学雑誌『Medicine』へのスポットビジョンの有用性に関する論文掲載について
- （中野区医師会）
- ②大手検査会社からの検査業務委託打ち切りに関する実態調査について（新宿区医師会）
- ③子宮頸がんワクチンキャッチアップ集団接種について
- （世田谷区医師会）
- （4）城南ブロック
- ①第十三回大田区医学会について
- （大森医師会）
- （5）城北ブロック
- （6）多摩ブロック
- （7）大学ブロック
- （8）都立病院医師会

地区医師会長
連絡協議会報告

令和6年9月20日（金）

◎都医からの伝達事項

（1）令和7年度東京都予算に対する要望事項について

来年度の東京都予算に対する

- る要望を提出した。今回の重点医療政策は、ここ1〜2年で実現させなくてはならない政策課題を中心に14項目にまとめている。本件について、東京都保健医療局長ならびに東京都福祉局長を通じて東京都知事に提出した。また都議会自民党、都民ファーストの会、都議会公明党の政党ヒアリングにおいて説明した旨、ご報告した。
- （2）利用検査会社に関するアンケート調査の結果報告について
- 東京都医師会A会員の「利用検査会社に関する現状」を把握することを目的とした、本アンケート調査の結果について
- （3）企業への認定産業医の紹介について
- 企業と嘱託産業医の選任を希望する医師とのマッチングについて、有料で産業医を紹介する業者を利用している状況が見受けられることから、本会では地区医師会において企業からの産業医紹介の要望にスムーズにこたえられるよう「産業医紹介エントリーシート」を作成したので活用いただきたい。
- （4）心肺蘇生を望まない傷病者への対応について
- 東京消防庁に行っている心肺蘇生を望まない傷病者
- （5）令和6年度精神科医療地域連携事業一般診療科向け研修（第1回）の開催について
- 一般診療科医療機関の医師等を対象に精神疾患の早期発見と理解促進を図ることを目的として、令和8年度までの3年間で年3回WEBによる研修会を実施するので、ご参加いただきたい。本年度は、10月11日（金）、11月20日（水）、令和7年1月23日（木）を予定している。
- （6）東京都医師会地域包括ケア委員会「ACP（アドバンス・ケア・プランニング）に関するアンケート調査」ご協力をお願いについて
- ACPに関しては、特に医師の関与は重要となるので、都内の現場の医師のACPに関する意識や取り組みの現状を検証することを目的に、アンケート調査をWEBにて実施するので、ご協力をお願いした。
- （7）令和6年度東京都在宅医療推進強化事業（24時間診療体制推進）実施状況について
- 令和5年度から3年間の予定で開始された、東京都から地区医師会への補助事業である東京都在宅医療推進強化事業

- ◎出席者による意見交換
- ◎その他
- （1）東京都社会保険労務士会からのご案内について

東京都医師会 定例記者会見

9月10日
(火)開催

今秋より新型コロナワクチンの定期接種が始まる。当該ワクチンについて東京都は、対象となる高齢者などの自己負担軽減のため、一定の補助をする区市町村に対し一人あたり1000円を補助する。尾崎治夫会長は「現在は三系統が99%を占めており、これに対応するワクチンを冬に備えて接種していただきたい」と述べた。

さらに当面の課題として、物価高騰対策をあげた。複数の病気を抱え、在宅で医療・介護を必要とする方が増えている現状を踏まえ、24時間見

守る地域包括ケアシステムが有効に活用されることが必要であるとした。これには地域を支える中小の民間病院の協力が必要不可欠でこれまで以上に望まれるが、「東京都ではその民間病院が、まさに今、未曾有の経営危機にある」と訴え、引き続き各担当役員から概説するとなつた。

た。高齢者や基礎疾患を有する人は重症化予防のために特に接種することが望ましいが、基礎疾患がなくとも後遺症は発症し、若い人でも3人に1人が長期化する後遺症に悩まされていると報告し、ワクチンの接種を推奨した。今年秋の定期接種に関して概説するとともに、現在の患者報告数、集団発生報告数を踏まえ「ポストコロナと言われているが、ポストではなく、今も診療所では闘っている」と述べた。

土谷明男副会長は、先月の記者会見に引き続き、東京都病院協会による都内病院の経営状況に関する調査結果をあらためて報告した上で、全国一律の診療報酬で医療を受けられるのは素晴らしい仕組みである一方、変わらない「収入」と、人件費・地価・物価などは地域によって異なり、さらに近年の負担増の傾向による支出のアンバランスが経営危機の明らかなる要因であると指摘した。地域病院の崩壊は地域包括ケアシステムの崩壊につながる懸念を示し、地域包括ケアシステムを支えるため東京都独自の入院基本料の創設を要望した。

パズル 請求事務 攻略のパートナー!

こたえ 当会があるから 解決が早い!

東京労働保険医療協会
会長 尾崎 治夫

東京労働保険医療協会
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-5
東京都医師会館 4階 TEL 03-5577-2960

七福神とは、日本において、庶民の暮らしに福をもたらすとして信仰されている七柱の神のことです。七福神を参拝することには、不老長寿、商売繁盛、五穀豊穡、家内安全など、所願成就のご利益があるとされています。

写真目は目黒不動尊瀧泉寺（地元では不動さんと呼ばれています）に隣接する林試の森公園の河津桜です。河津桜というと伊豆下田が有名ですが、林試の森公園の河津桜もなかなか立派です。見頃は2月下旬から3月中旬となります。

大坪由里子理事は、都内4地域における数々の病床廃止、閉院、診療停止の具体的な状況を示し、尾崎会長、土谷副会長とともに都内病院の

医師国保からのお知らせ

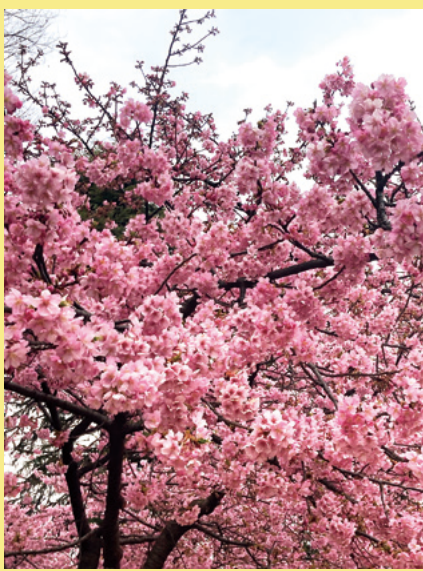
医師国保に加入しましょう!

～医師国保は都医会員の 相互扶助を行う国民健康保険です～

- 新たに東京都医師会に入会した方
- 現在区市町村国保の保険証をお持ちの方
- 退職等により共済・組合健保等の資格を喪失した方は、ぜひご家族や常勤の従業員の方と一緒に加入してください。

各種届出に必要な書類は、ホームページよりダウンロードできます。

東京都医師国民健康保険組合
☎ 03-3270-6433 (業務課)



林試の森公園の河津桜

元祖山手七福神めぐりと
林試の森公園

福を求めて目黒そぞろ歩き

趣味の散歩

（目黒区医師会・渡邊道隆）

知ってますか?

国際人道法

国際人道法は、戦時下における手段を具体的に制限・禁止する国際的取り決めで、交戦手段を制限する「ハーグ法」と戦争犠牲者を保護する「ジュネーブ法」に分けられ、病院への攻撃も戦争犯罪に該当すると言われている。

都医ニュース2号(昭和36年2月発行)をお持ちの方はご一報ください
東京都医師会広報事務局
☎ 03-32294-8821

練馬区医師会

海老原亜貴子

安定か、それとも進化か

「ハイキュー」というバレーボールの漫画をご存知でしょうか？

「強さを手に入れる為に求めるのは安定かそれとも進化か」

「護りに入って進化はあるのか」

「変化を求めない者には進化もない」

これらは、私の心に響いたハイキュー9巻に登場する音駒高校、猫又監督の言葉です。息子が読んでいた漫画のセリフに、自分自身の人生を考えさせられるとは全く予想外の出来事でした。

当時私は日常診療と育児の両立で毎日余裕がありませんでした。ちょうどその頃、コロナが流行し始め、世の中が激変した時期でもありました。仕事は手を抜かず一生懸命頑張っています、と自信を持って言えたものの、「果たして私は進化しているのだろうか？」と考えさせられました。変化を求めることはリスクを伴うことでもあり、状況が悪化することさえあります。そのため、安全、安定を求め、無意識に現状維持を求め、リスクを回避しようとする思考に陥っているのではないかと自問自答しました。

大学の入学式で学長先生がおっしゃっていた「医療は日進月歩。皆さんはこれから一生勉学に励み、日々努力していくのです。」というお言葉も思い出しました。医師として当たり前の事ですが、日々進化する医学の知識を深め、医療の発展や時代の流れにアンテナをはり、変化を恐れず前進していくことが大切だということを、猫又監督の言葉を通して再確認することが出来ました。地域医療を担う者として、可能な限りコロナ診療にも携わりました。また、今後も地域医療に貢献していきたいと思っています。

猫又監督の言葉は、日常生活においても響きました。加齢に対する諦めや慌ただしい日常生活を理由にして、髪型も洋服もスキンケアも、「これでいいや」と無

難にやり過ごしていました。いつの間にか、「お姉さん先生」と言われることが心苦しくなっていました。2歳年上の姉の方が、私より若く見られ、最近に至っては、私は患者様に30歳年上の院長（実母）と間違われることもあり、これが私の真の姿だと痛感しました。そのため、一念発起し自宅での飲酒をやめ体型維持に努め、年齢に合ったスキンケアを心がけるようになり、加齢との向き合い方や年齢に見合った進化も考えるようになりました。

「安定かそれとも進化か」

安定を求めることを選択したとしても、思考を止めないこと。変化することを恐れず、理想は進化すること。私はこの言葉を胸に刻み、生きていきたいと思います。

（「だより」2023年11月 第668号より抜粋）



曼殊沙華とあげは蝶 昭和記念公園

武蔵村山市医師会 押切 勝

玉川医師会

松村真司

死語について

当院には以前より定期的に医学生や研修医が実習に訪れる。若い彼らとともに診療をするのは刺激的であると、彼らとの会話の中でうっかり発した言葉で世代間ギャップを思い知らされることもしばしばである。少し前に、最近では巻き戻しとは言わず、早戻し、と呼ぶようになっていることが話題になったが、確かにVHSやカセットテープという媒体が世の中から消えて久しく、「巻いて戻す」という行為が消失した今となっては、それに対応する言葉が変化するのも当然であろう。

医療現場でも、「シャウカッセン」や「カーデックス」が既に死語となっている。すべてがデジタル化された今では、これらがどのよう

なものか若い先生たちには想像もできないだろう。「え？食べ物ですか？」とか「車用品が何かですか？」などの答えがきてもちっともおかしくないし、それに対しムキになって説明するのもちよとした虚しさが伴う。

これからも時代の変遷に伴い、様々な言葉が死語となっていくだろうし、それはやむを得ないことである。でも、発熱外来や濃厚接触等、新型コロナウイルス感染の言葉たちが、早く死語になって欲しいと、心から願う令和5年の正月である。

（「玉医ニュース」2023年3月 No.677より抜粋）

無 声 拝 聴

趣味の自動車

先日、新車を買った。ディーラーで車を買うのは生涯2度目である。

1度目は1995年、当時最員のメーカーが長年挑戦していたWRC（世界ラリー選手権）で初めてドライバズチャンピオンを取り、記念レプリカモデルが発売されたのを、東京モーターショーで見て一目惚れして、ダメ元でディーラーに行ったら、ラリーのベース車なら在庫があると言われ、即オーダーした。

最近欲しい車もなく、あっても手が届かない価格帯なので、ただの憧れであった。車がないのも困るが、奥さんの実家の義父が腰を痛め、運転出来ないとのことなので、預かった（巻き上げた）普通のファミリーカーを乗り回していた。娘が研修で、千葉に半年行くことになり、車が欲しいと持って行かれたので、何か買おうとなったのだ。

さて何を買おう？ハイブリッド車か？eパワー（ガソリンで発電、モーターで走る）か？いっそのこと電気自動車（EV）か？

でもインフラの心配が残る。東京都では2030年、日本でも2035年にはガソリン車やディーゼル車の新車販売はされなくなるらしい。しかし、ハイブリッド車は売られるんだ。変なの。

まあ、いずれにせよ主流はハイブリッドだな。でも昔からの車好きとしては、世界中で売れるからという理由で流行らされただけのSUVや、昔流行ったミニバンなどは本来許せない。

はずだったのだが、世の中の流れてのか、主流ってのは怖いね。街でちょこちょこよく見掛けている、そんなに悪くないじゃん。となってきた。長いものには巻かれる。であろうか？歳を食って丸くなったのであろうか？ハイパワー命の気持ちは流され、すっかり普通でいいや。という気になった。

で、日本一のメーカーのディーラーへ行って、恥ずかしながら、社一押しなんちゃってSUVを指名買いた。今回も、フラリと来て、アレくれ、在庫あるか？って車を買に来る人は珍しいらしく、びくりされたが、流通在庫にまあ気に入った色があり、無事納車となった。

電車地下鉄の方が早く移動出来て、保管や行った先での駐車場に困る東京では、自動車は持て余し気味だろう。ステータスシンボルだった自動車。今や趣味の物か？そろそろ終の車を考えなければだが、最後だから外車とかスポーツカーとか、思い切ってスーパーカーか？などと、言ってるだけならタダである。（大畑隆郎）

ユニセフ『世界子供白書2023』

ユニセフは、毎年その年のテーマを決めて基幹報告『世界子供白書』を発行している。2023年のテーマは、“すべての子どもに予防接種を（For Every Child, Vaccination）”であった。

ジェンナーによる種痘に始まり、2世紀以上にわたってさまざまなワクチンが開発され、感染や重症化を防ぎながら人の健康を支えてきた。ユニセフの活動の中でも、予防接種は最も成果をあげてきた取り組みの一つである。

我が国では1966年にKL法（不活化ワクチンと生ワクチンの併用）による麻しんワクチン接種が開始され、その後1969年からは新たに開発された高度弱毒生ワクチンに切り替わり、1978年10月から定期接種に組み入れられた。他の取り組みと2006年からのMR（麻しん・風しん混合）ワクチン2回接種の導入もあり、2015年3月27日、世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局により、日本が「麻しん排除状態」にあることが認定され、排除後は海外からの輸入例と、輸入例からの感染事例を認める状況になった。

ところが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響もあり、世界的に子どもの予防接種率が低下し、過去30年で初めて大きな後退を見せた。これには、紛争と避難民の増加、ワクチンに関する不正確な情報に伴う“ワクチン忌避（Vaccine Hesitancy）”などの要因も関わっているであろう。「正確な情報（知識）を得たうえで、自分（保護者）の判断で予防接種を受けない」ことと、「ワクチンがあることを知らなかった、正確な情報が入らなかったから受けない」では、まったく事情が異なる。医療従事者には、被接種者からの質問・疑問に答えられるだけの十分な知識が求められる。そして正しい情報が全員に届くように発信し続ける必要がある。

（文責：萩原温久）

感 染 症 豆 知 識

東京都医師会
感染症予防検討委員会

地区医師会長からの一言 葛飾区医師会の現状と今後

葛飾区医師会長 大山高令



令和5年6月17日開催の葛飾区医師会総会ならびに臨時理事会にて、第22代葛飾区医師会会長職（代表理事）に僭越ながら就任させていただきました。葛飾区医師会は昭和7年の雨谷達三初代会長が昭和21年まで会長職を務め、第21代目は前任の伊藤隆一会長となっています。

私は岐阜市の生まれで、高校まで岐阜市で過ごし、東京の大学に行こうとしたものの東京を通り越して陸の孤島筑波で6年間を過ごしました。大学卒業後、今度は東京で臨床研修をしようと思い、五反田の大病院にて初期研修と消化器内科の専門研修を合わせて5年間行いました。その後、母校筑波の大学院にて論文を作成し課程博士となった一方で、葛飾区堀切にて開業して四半世紀となります。

この四半世紀の間には、近隣の開業医の先生がお二人逝去され、三人の先生が開業されました。25年前には新人開業医であった私も、現在はどちらかというと古株に属する開業医になっています。

医師会では9年ほど前に葛飾区医師会地域医療部理事となり、5年ほど前からは副会長として地域医療部（在宅医療認知症対策、地域包括ケア）や応急診療部や学術広報部を担当してきました。

理事職においては、猪口東京都病院協会会長が始められた病院救急車を用いた在宅医療サポート搬送入院システムKDASや、稲葉認知症対策委員会特任委員長が始められたもの忘れ予防健診などを引き継ぎました。また駒形元理事と共に地域包括ケア推進委員会を立ち上げ、MCSによる地域包括ケアICTトライアルを開始しました。ICTトライアルでは一定の成果を上げ、本年からは24時間診療体制推進補助事業のかつシカ連携医サポートシステム

KDS2でもMCS活用しています。

理事、副会長職においては、葛飾区在宅医療介護連携体制整備補助事業のかつシカ連携医相談室や、PTSTOT管理栄養士で運営する葛飾区医師会フレイル予防サルコペニア対策室を立ち上げ、葛飾区オリジナルの76歳と81歳での健康長寿いきいき健診（フレイル予防健診）や70歳の健康長寿筋肉元気健診（サルコペニア対策健診）の導入をしています。これらのオリジナル健診と葛飾区医師会フレイル予防サルコペニア対策室の相互リンクで葛飾区民の健康長寿介護予防に取り組んでいます。

またコロナ禍の応急診療部では、コロナPCR検査センターや発熱外来などの運営を行い、現在は東京都と医療措置協定を結んで発熱外来を継続しています。数年前には葛飾区医師会公式X（旧：Twitter）の開設をして広報活動にも力を入れています。

会長職においては、都内に4カ所のみ残っている医師会開設の看護学校の運営にも力を入れています。葛飾区医師会の看護学校は、准看護師コースと正看護師コースの両コースがあるのが特徴です。災害対策においても本年、葛飾区との協定を刷新して、病院前トリアージ体制での防災訓練を行っています。

更に葛飾区医師会に事務局を置いて、墨田区医師会と協働で対応している東京東部地域産業保健センターの運営も行い、東京都医師会のタバコ対策活動に合わせて受動喫煙等医療問題検討会議を葛飾区医師会でも始めています。

日々手探りではありますが、より良い葛飾区医師会であるように今後もブラッシュアップしていきたいと思っています。